

7 フェロモントラップを利用したハスモンヨトウ防除の取り組み

ねらいと成果

昨年（1999年）のハスモンヨトウの大発生は記憶に新しい。今やハスモンヨトウは秋作野菜にもっとも大きな被害をもたらす害虫になってい。薬剤だけでは抑えきれない事態に悩む生産現場も多い。そうした背景からフェロモントラップ（以下単にトラップ）利用への関心が高まっている。

淡路島の南部では1996年からトラップを用いた大規模なハスモンヨトウの大量誘殺防除が実施されている。実施地区ではトラップへの誘殺数が極端に減少し、作物の被害も軽減した。最近では島内のハスモンヨトウの発生が少なくなる傾向もみられる。また、JA や普及センターは発生予察へ活用し、適期防除や注意喚起に役立てている。

内容

1 フェロモントラップの設置

淡路島の大量誘殺の試みは1996年に850 ha から始まり、1999年には約2600 ha を囲む地域に及んだ。

ハスモンヨトウの性フェロモン剤（フェロディンSL 大量誘殺用、武田薬品工業(株)製）とファネル型トラップを用い1 ha 当たり1基の割合では場に設置し、8月から12月まで誘殺を続けている。

2 非実施地区との比較

実施地区は非実施地区に比べ明らかに誘殺数が少なくなった（図1）。この現象は複数のトラップを設置することでハスモンヨトウの誘引が分散されて

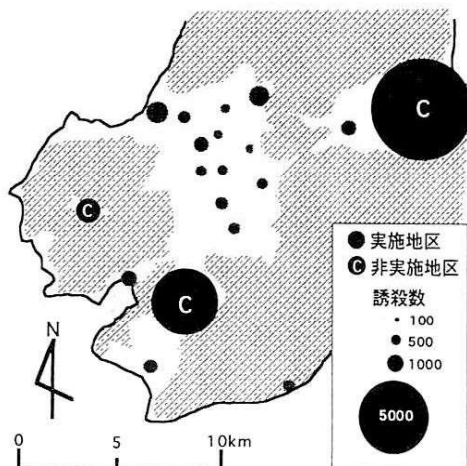


図1 大量誘殺実施地区内外での誘殺数の比較
トラップ1基当たりの累計（1997年9、10月）

いることを表す。トラップの誘殺能力が適正な状態にあるといえる。

被害指標作物として設置した矮性カーネーションでは実施地区の被害程度が低かった。すなわち、作物での被害軽減効果が示唆された（図2）。

3 島外地域との比較

大量誘殺を始める前年（1995年）、島内の誘殺数は近隣の島外地域よりはるかに多かったが、大量誘殺を始めた前から非実施地区の誘殺数は急減していった（図3）。島内の発生が少なくなってきたことが伺われる。

普及上の注意事項

フェロモンによる防除は効果を実感しにくい。まずは発生予察を主な目的として根気よく取り組むとよい。

八瀬 順也（病害虫防除所）
（旧淡路農技・農業部）

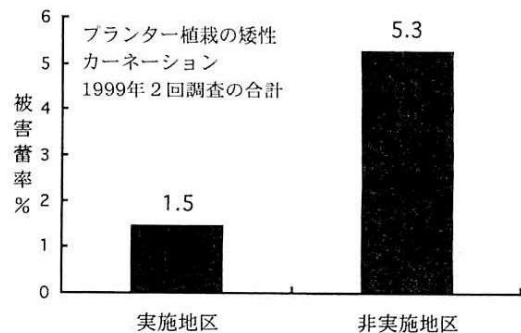


図2 指標作物の被害程度

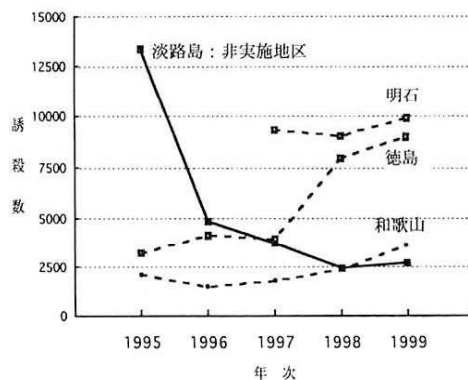


図3 ハスモンヨトウ誘殺数の島外地域との年次比較
トラップ1基当たりの累計（9、10月）